

中等教育における英語の スピーキング能力育成と評価のあり方

On Teaching Techniques to Develop and Assess the Oral Proficiency of
Japanese Learners of English in Secondary Education

佐藤 史郎

Shiro SATO

Abstract

Having Japanese learners in secondary education acquire English oral proficiency is imperative because without it they cannot be expected to persuade others at meetings of various levels, succeed in business negotiations, or assert themselves positively in spoken English.

In order to achieve this aim I have emphasized the importance of Japanese educators providing learners with a strong incentive to speak more positively. Furthermore, I have demonstrated specific language activities targeted at making learners become capable of expressing themselves.

I am seeking to demonstrate these language activity models so that we can not only assess learners' oral proficiency, but also expand their speaking competence more vigorously.

はじめに

国家間の国際会議、他国企業との間のビジネス交渉、さらには外国人観光客に対する日本文化の説明に至るまで、スピーキングの能力が求められる度合はかつてないほどの拡がりを見せている。ディベートやビジネスの交渉の場で必要とされる英語力は独特な表現形式や専門用語に慣れる必要があるものの、最も重要なのは、スピーキングの基礎能力である。

中等教育終了後に、職務上英語で会話を行わざるを得ない状況になった場合に、基礎能力が身につけていれば、その後の努力でコミュニケーションを成功に導くことが可能になる。このことを考えると、中等教育のもつ意義深さは計り知れないといえよう。

他の能力同様、話す能力も日々の英語の授業の中で培われるよう工夫することが何より肝要である。そこで本稿では、中等教育の英語の授業の中で話す能力が育成されるような枠組みや方法、およびスピーキング能力の評価のあり方について論じたい。なお、このような目的のために本稿

では、中等教育で英語を学んだ大学生が他の3技能との比較の中でスピーキング能力の向上についてどのように考えているか、また英語で表現する際、どのような言語要素を不得手と考えているかなどについての調査を参考にした。

話す能力向上に対する日本人学習者の意欲

まず、日本の英語学習者のスピーキング能力向上への意欲がどの程度高いのかを知る必要がある。この点に関して、土屋他(2000)は中学生を対象にした各種アンケートで、英語を話せるようになりたいという強い願望を中学生が抱いていることを明らかにしている。また、「一般英語」教育実態調査研究会(1985)が大学生及び短大生約一万人を対象に行なったアンケート調査でも、一般教育の英語で最も重点的に習いたい技能としてスピーキングが挙げられている。

一般教育の英語ではどの技能を
最も重点的に習いたいですか (p.111)

| [一つだけ選んでください] | | 有効回答者数 | 10,106 |
|---------------|--------|--------|--------|
| 聞くこと | 1,489名 | 14.3% | |
| 話すこと | 6,153名 | 59.3% | |
| 読むこと | 2,136名 | 20.6% | |
| 書くこと | 317名 | 3.1% | |
| 無効・無答 | 275名 | 2.7% | |

これらからは、少なくとも日本人学習者の多くが英語が話せるようになりたいという強い願望を抱いているということが分かる。一方、話す能力に直接・間接に影響を及ぼす聴解力、文法力、語彙力、読解力などに関して、日本の学生を中国・韓国の学生と比較すると、すべてのセクションと総合点において日本の学生が劣っているということを大学英語教育学会九州・沖縄プロジェクトチーム(1997)が明らかにしている。

以上から明らかなことは、日本の学生の話す能力向上への意欲・願望は強いものの、話す能力に直接影響を及ぼす文法や語彙の能力を中国や韓国の学生と比較すると、日本の学生が劣勢に立っているということである。願望は強いが実力がまったく伴っていないということが、このテーマを論ずる場合の重要な出発点となるであろう。

国家間の会議やビジネス交渉、さらにはさまざまな分野の話し合いの場で、最終的に交渉の成否の鍵を握るのは、相手側との口頭によるコミュニケーションの内容に大きく依存することを考えるとき、中等教育におけるスピーキング能力をいかに効率よく強化していくかがきわめて重要

なテーマなのだということが理解できよう。

中等教育におけるスピーキング能力育成のポイントと方法

前項では、中学生や大学生の側に話せるようになりたいという願望が4技能の中で最も強いことが判明した。そのような願望が実際のスピーキングの能力向上に結びつくようにするため、中等教育の現場の教師はどのような意識をもって指導に臨むべきか、また具体的にどのような指導をすべきか、さらに生徒の動機付けを高めるためにはどのような環境作りをすべきかなどについて論じていきたい。広野他（2000）は、大学生自身がスピーキングを不得意に感じている要因を以下のように明らかにしている。

- (1) 英語の発音に自信がない。
- (2) 適当な表現がすぐに思い浮かばない。
- (3) 文法を意識し過ぎる。
- (4) 誤りを恐れる。
- (5) その場にふさわしい表現が思い浮かばず、適切な反応ができない。
- (6) いつも日本語で考えたものを翻訳しようとしており、英語で考えることができない。

(p. 89)

これら要因の中で注目すべきは、(1)、(3)、(4)が発話者自身が心の中に精神的な壁を作ってしまったことに起因する可能性が高いということである。筆者が約37年くらい前、アメリカに留学していた際、しばしば留学生と話をする機会があった。総じて、中近東や南米からの留学生は非常によく喋るが、よく聞くと文法的な間違いの多いことに気づいた。しかしアメリカの学生によると、彼らの英語はよく分かるという。一方、日本人留学生は会話の輪の中に入ってこないだけでなく、たまに喋っても十分理解されていないことに衝撃を受けたことがある。このこと背景に、日本の英語教育（他の教科にもいえる）が受験を強く意識しているため減点教育になっており、学生は文法の誤りをことのほか意識し過ぎていることが挙げられよう。英語は日本語と対極にあるような言語である上、例外の規則が最も多い言語の一つでもあるので、間違っただけで、勝手に相手に通じさせるのだという気概のようなものを持つことが何より大切と思われる。従って、今後オーラル・コミュニケーションの言語活動を行なう際には、誤解を生じさせたり、相手側に不快感を抱かせる恐れのある表現をした場合を除いて、文法面の誤りの指摘は最小限にとどめるべきであろう（そのような表現の修正を促す場合も学生が表現し終えるまで待つことが望ましい）。ネイティブ・スピーカーと会話をしている際に、彼らは日本人

が話そうとしている内容に注目しているのもあって、文法の正しさなどに注意を払っているのではないということを肝に命ずるべきである。

スピーキング能力育成の際に教師が最も重視する必要があるのは、学生が不得意と感じている要因の(2)と(5)であろう。これらに関して、口頭でコミュニケーションを行なう際には、会話の相手は発話者が適切な表現を思い浮かべるまで待つてはくれないので、会話がそこでストップしてしまうことになる。間髪を入れず、適切な表現が言えるためには、一つの機能表現を行なうのに多様な表現をストックとして持っていて、それらのうち最も適切なものを直ちに表出しなければならない。従って、英語教育の場では、表したい内容に対応する多様な表現を積極的に覚えようとする学習態度を持ち続けることの重要性を学生に強調するとともに、このことを可能にするような指導法を工夫する必要がある。

たとえば、ALTの協力が得られる場合、一時間のうち10～15分程を割いて、生徒一人を指名してALTと会話を行なうとする。生徒が表現に詰まった際、どのように対処したらよいだろうか。そのような場合、先ず日本人教師がその場に合った適切な表現を板書し、その後ALTが同じ意味をもつ別の表現を対話形式の形で板書してもらうのである。こうすることによって学習者は、会話の状況にあった表現を2通り以上学べ、同様の状況に対応する能力が培われることになる。なお、日本人教師はALTと打ち合わせを行なって、生徒が興味を持ちそうなさまざまなトピックをあらかじめ用意しておくことも動機付けを高める上で重要である。

表現形式の多様性と並び重要なのは、語彙の豊富さである。中学校においては具象語・抽象語を問わず絵やカードをうまく利用し、品詞やトピック(スポーツや食べ物など)ごとに効率よく学ばせることも一つの方法である。英語の特設教室の利用が可能であれば、教室の壁面に期限を限定してトピックごとの語彙をビジュアルに展示することにより、楽しい雰囲気の中で語彙の増強を図ることが可能である。高等学校レベルでは、語彙力増強のための副教材として日本語訳の入った週刊の英字新聞を活用し、会話や口語表現を扱ったコラムの中で使われている語彙を文脈の中で理解させた後にペア・プラクティスの中で使いこなすことによって、生徒たちの表現用語彙の定着を促すことができよう。

スピーキング能力をいっそう高めるための言語活動

一分間スピーチ

たとえ一分間といえども人前で英語を話すためにはそれ相応の準備が要るが、むしろそのため一分間スピーチは有効な言語活動だといえる。

スピーチのテーマが決まったら、そのテーマに沿った生徒の体験事例や知識をもとに全体の構成を日本語で作らせる。そして自分が知っている構文や語彙の範囲で英文によるスピーチ原稿を

作らせる。これらの作業は、日本語と英語の発想や表現方法の違いに気付かせる意味でも大変意義深いものである。スピーチの原稿が完成するまでは、音声リーディングの指導から英語構文と語彙のチェックに至るまで教師が指導・助言する必要がある。ALTの助力が可能な場合は、音声リーディングとスピーチ原稿全体の構成の面で日本人教師の肩代わりをしてもらうとよい。このように、スピーキングとライティングという発表能力の面でALTに積極的に関与・協力してもらうことが彼らの存在意義を高めると同時に、指導を受ける生徒の内発的動機付けが高まる事が期待できる。

さて、一分間スピーチというと、スピーチを行なう生徒が言語活動を行なう主体で、他の生徒たちはその他大勢という位置付けで捉えられがちだが、そうではなく、スピーチも双方向のコミュニケーションの一種なのだという考え方に立脚する必要がある。一方通行から双方向のコミュニケーションにするための有効な手立ては、リスナーである生徒たちにスピーチ内容を審査させることである。ジャッジの役割を担わせることによって、聞き手である生徒たちはより真剣に聴くようになるだけでなく、自分がスピーチを行なう際の貴重な指針として審査内容が活きることになる。スピーチで使われる構文や語彙が未習のものを含んでいる場合は、あらかじめ板書するかプリントで配るなどの配慮が欲しい。しかし、基本的な考え方として、既習の構文や語彙を最大限活かすことが前提となる。スピーチの内容は、発表者が興味や関心を持っているトピック、もしくは自分にとって印象深い体験に基づいたものなどが、聞き手にとってもより強いインパクトを与えるので好ましいであろう。

スピーチに対する評価は発音や表現の正確さを厳しく求めず、スピーチ内容の良い面を前面に出すような寛容な姿勢で対処すべきであろう。生徒達による審査内容（自由記述も含む）はスピーカーに後ほど手渡し、改善のための材料として使ってもらえるとよい。なお、一分間スピーチは一授業時間内に2～3人くらいが適当であろう。

スキットによる創作活動

これは既習の構文を使って、ペア同士でスキットを作らせる言語活動のことである。一定の大きさの紙に夫々のペアが考案した会話を書かせ発表させれば、スピーキングとライティングの練習になる。四行以内で収まる程度のスキットを暗記させて口頭で発表させてもよい。この種の言語活動を授業の一環として定期的に導入することにより、生徒は表現することの喜びを知り内発的動機付けを高めることにつながる。スキットをユーモアや機知に富んだ内容に仕立て上げたペアを褒めるようにすれば、更なる向上心を刺激することになるであろう。何よりも既習の構文に既習の語彙を織り交ぜて全体として意味の通ずるスキットを作ることは、未知の言語使用状況に遭遇した際に、既習の構文を使って全く新たな表現が出来るようになるための練習をしていることになり、スピーキング能力の育成にとって貴重な練習となる。会話能力のさらなる育成を目指す

した言語活動に結びつけるためには、会話のトピックについて一方が自分の知識や体験を披露する必要がある。たとえば、ペアの一方が対話の相手に行きたい国や将来なりたい職業を尋ねた場合、尋ねられた側にその理由を考え付くだけ説明させる方法がある。この方法は趣味、食べ物、スポーツなど広範囲なトピックのもとで利用することができる。とっさに表現できない場合、日本語でメモ書きさせてもよい。いずれにしても、日本人に最も欠けているコミュニケーションにおける積極性を育成するのにこのような言語活動は不可欠と思われる。

中等教育におけるスピーキング能力の測定及び評価のあり方

英語のスピーキング技能は、音声、語彙、文法面の知識を習得した上、それらを未知のコンテキストの中で練習して初めて運用能力にまで高めることが可能になる。しかしながら、英語教育の現場では知識の集積を最終的な目標にして英語教育を行なっているケースが少なくないのではないだろうか。技能の運用能力は知識なしには発揮できないのだから重要であることは言をまたない。しかし、教科書や副教材の中で扱っている内容は各課で導入された言語材料を駆使して考え出されたほんの一例に過ぎない。従って、教師は生徒が既習の言語材料を使って未知の言語コンテキストの中で、自分が伝えたい内容や見解を表現できるまでに能力が定着しているかどうか定期的に検証することが極めて重要なのである。さらに、そのようにして測定した結果をスピーキングの評価の一部（たとえば30%）として組み入れる必要がある。評価の信頼性を高めるためにも、生徒の発表内容を簡単な評価法を使ってコンスタントに記録することが望ましい。ただ、スピーキングと言っても双方向のコミュニケーション活動の中でその出来、不出来を測定するのが自然で、妥当性にも叶うということを忘れてはならない。以下、既習の知識がスピーキング能力としてどの程度定着してきているかを評価するための具体的方法を述べたい。

スピーキング能力の基礎を養う練習の中で評価

- A. 既習の文型・構文を使って新しい文を即座に言わせる。
- B. 既習の文型・構文をつかって、オーラル・アプローチのセレクションの中の Pupil-pupil Dialogue を行なわせる。
- C. ペアを組ませ、既習の文型を使って各々独自のスキットを作らせる。その後、すべてのペアに発表させ、言語面と内容面でよく出来たものを褒める。

積極的にコミュニケーションを図る態度とスピーキング能力を

いっそう育てるための練習の中で評価

- D. 双方向のコミュニケーションを発展させるため、問いかけられた側に付加的説明をさせ

る。その際利用できるトピックは、「訪れたい国」、「趣味」、「将来なりたい職業」などである。問いかける側はさらに多様な情報を引き出すべく質問を行なう。パートナーを変えて同じ練習を行なう。このような言語活動は、日本人が日常会話や国際会議の場で終始受身に回り不利益をこうむることを少しでも防ぐためにも不可欠な練習と思われる。

- E. さまざまな事物や人物の移動・アクションなどが描いてある街中の絵や、家庭内で家族が思い思いの活動をしている絵などを見せ、想像力を駆使し、出来るだけ多くの場面を捉えて英語で説明させる。

おわりに

日本人が最も強い苦手意識を抱いている技能は話す能力である。多くを語る必要のない文化で育ち日々生活をしてきた日本人が、言語体系のまったく異なる言語を用いて意思の疎通を図るのが不得手なのは充分うなずける。

しかし、日本人の英語によるコミュニケーション能力の欠如がもたらしてきたであろう、おそらく天文学的金額の損失と中等教育が今後担うべき役割の重大さに鑑みて、本稿では、話す能力を育成し評価するための基本的考え方とそれに基づく具体的な言語活動について若干の提案を行った。

主要参考文献

1. 青木昭六（編）. 1994. 『英語授業実例事典Ⅱ』大修館.
2. Bachman, Lyle F. 1990. *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford University Press.
3. 大学英語教育学会九州・沖縄支部プロジェクトチーム. 1987. 『このままでいいか大学英語教育』松柏社.
4. 大学「一般英語」教育実態調査研究会. 1985. 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究（Ⅱ）— 学生の立場—』
5. 佐藤史郎. 1994. 「ディベート能力養成の勧め（論点）」『読売新聞』（朝），2月16日，12頁.
6. 土屋澄男，広野威志. 2000. 『新英語科教育法入門』研究社出版.
7. Underhill, Nic. 1987. *Testing Spoken Language*. Cambridge University Press.

